

観光地づくりオーラルヒストリー <第10回>

観光の“学と術”の体系化と観光計画

東京工業大学名誉教授
鈴木忠義氏

1924(大正13)年東京都・向島生まれ。1949(昭和24)年東京大学第二工学部土木工学科を卒業。同大学林学科演習林助手、土木工学科助教授、都市工学科助教授を経て、1966(昭和41)年東京工業大学土木工学科助教授、1969(昭和44)年同大学社会工学科教授。1982(昭和57)年東京農業大学教授に転じ、1995(平成7)年退職。東京工業大学名誉教授。学部学生時代に観光地の研究を志す。1985(昭和60)年に「観光レクリエーション計画に関する一連の研究」で日本都市計画学会石川賞、1996(平成8)年に第14回日本造園学会上原敬二賞。日本観光研究学会初代会長。

第1部 一問一答

1. 「観光」への接近

【なぜ観光の道を選んだのか】

僕は今、92歳です。1924(大正13)年生まれですから、戦争も経験しています。戦争前も観光というものはありましたが、戦時中はそれどころじゃないという状況になりました。そして戦争で工業が全部ぶちこわされ、戦後になって日本は「これからは観光立国でいかないとだめだ」となったわけです。

本来なぜ、観光というものがあるかをよく考えてみると、人間の喜びを目的としているいろんなことを考えないと駄目だということにつながります。それは食べるのに精一杯という状態ではなく、文明国になったことです。ただ単に生きていくだけではなく、人間の生活の中に喜びの状態を作らなければいけないという思いがありましたね。

【観光との出会いはいつ、どこで・・・】

最初は、やはり修学旅行です。それに、僕の出身は東京ですが、弘前の高等学校に行っていたんですよ。所変われば品変わるで、東京とは違う地方文化が面白かったですね。

夏休みになると夜行で青森に行ったり、東京の家へ帰る時も羽越線を使ったり、奥羽線を使ったり、子どもが電車に乗ると窓の外を見飽きないように、20歳近くになっても車窓からの眺めが楽しく、旅の喜びをこの時に知りました。弘前の人には随分よくしてもらったので、卒業してからもずっとつきあっていました。



写真1 鈴木忠義氏への取材風景
(2016年(平成28)3月15日、東京都世田谷区)

理系は在学中に学徒動員で引っ張られたこともありませんから、東京～弘前の行き来などと合わせて全国的な視野が開けて、旅行することが面白いということを感じたんですね。

1949(昭和24)年に東大の第二工学部土木工学科を卒業して、まず農学部林学科の演習林で造園学の助手を務めました。ですから、演習林のことは全然やっていない(笑)。演習林担当の先生が「これでお前、旅行してこい」と旅費をくれて、随分いろいろなところに出張に行かせてくれましたね。その後、八十島義之助先生が東大工学部に都市工学科ができるから来いというので、1961(昭和36)年に工学部に戻りました。

当時、観光を正規に勉強してる人なんていませんでしたが、全日本観光連盟(全観連・日本観光協会の前身で現在の日本観光振興協会)で観光地診断というのをやっていたんですよ。僕はその常連で、全国の観光地を見ることができました。

東工大に移ったのは1966(昭和41)年、退官して東京農業大学へ移ったのが1982(昭和57)年でした。

表 1 鈴木忠義氏の経歴

1924(大正13)年	東京都生まれ
1949(昭和24)年	東京大学第二工学部土木工学科 卒業
1949(昭和24)年	東京大学農学部林学科演習林 日雇
1950(昭和25)年	同 助手
1961(昭和36)年	東京大学工学部土木工学科 専任講師
1963(昭和38)年	東京大学工学部都市工学科 助教授
1966(昭和41)年	東京工業大学工学部土木工学科 助教授
1969(昭和44)年	東京工業大学工学部社会工学科 教授
1982(昭和57)年	東京農業大学農学部造園学科 教授
1995(平成7)年	東京農業大学 退職

* 鈴木忠義氏の経歴・業績については例えば次の書籍に詳しい。「ピカソを超える者は 評伝 鈴木忠義と景観工学の誕生」篠原修(技報堂出版、2008(平成20)年)

2. 「観光」における取り組み

【私は観光分野で何をやってきたのか、観光分野での業績、功績は何か】

●常に先手を打って来た～東大助手時代に取り組んだ道路景観計画

僕がやってきたのは、観光地計画ですね。観光地づくりです。

僕は常に先手先手を打って、追いつけ追いこせの連中よりも先に、いろんな提案をしてきたと思います。

その一例が、僕が学校を卒業してまだ2、3年目の東大助手だった頃、道路公団と行った高速道路の計画を作る仕事です。その時、僕は「国全体の事業の中で、観光というものを考えないと駄目だ」と言いました。ただ、単に経済だけ、人やものの動きだけを見て作る計画ではいけない、人間の喜びを考えないといけないということです。

それを体現したのが、アメリカのパークウェイです。誕生したのは1920年代じゃないかな。これに倣って道路を造るならきれいで楽しい道路にしないとイケない、日本全体は国土が狭いから、日本全体の国道や高速道路は、緑化などを進めてパークウェイ的にしないとイケないと、随分言ってきました。

高速道路のサービスエリアには、建物と駐車場に隣接したエプロンというエリアがありますが、以前はそのスペースなんて全然とらなかったんです。でも、「訪れた人が駐車場の前に行ったり来たりする場所があることが大事なんだ」と大論争をしたこともあります。

道路公団の人達は、予算を節約するために大蔵省から「できるだけ敷地を小さくしろ」と言われているわけで、だから、そういうスペースは不要だというわけです。そうじゃないんですよ。あそこでうろうろしたり、仮設の店を出したりすると賑わいや楽しさが出て来る。変化を持たせることができる空間ですよ。実際、エプロンが広いサービスエリアは非常に使いやすいという話は、経営者から聞いています。

当時は、海外のアウトバーンの交通量が少ないところを見て、そこにあるサービスエリアを手本にしていましたからね。日本のように人口密度が高い国で、特に大都市周辺は事情が異なり、週末交通の集中発生なども考えないとイケないということです。

道路公団の初代総裁だった岸道三さんに直接進言したこともあります。「もっと沿線の道路用地をとってください」とね。高速道路が沿線を規制しているように、一級国道も沿線規制をして側道を作り、一度側道に降りて、そこから地域に行けるようにするべきだと。かなり理想的なことも言いましたが、岸さんは僕の意見をよく聞いてくれました。

当時、僕は東大の助手という身分だったけど、道路公団の高速道路調査会という研究団体のサービス部会長を務めました。サービスエリアなどを研究する部会で、メンバーは自動車連盟やトラック協会、建設省の道路課長、高速道路課長な

どがいましたね。今も高速道路調査会にサービス部会のレポートがいろいろあると思います。

その後、サービスエリアについては、随分進歩したと僕自身は思っています。観光旅行、観光交通というものが多くなったからかもしれません。要するにマイカーがビジネスだけでなくレジャー、楽しみのために使われているということですね。

●高山・草津・川場

業績、功績と言えるのは高山市・草津町・川場村の3地域での観光計画ですね。もちろん、そのほかの地域にも口頭でアドバイスしたり、講演などもいろいろしましたが、よく行ったのは3つです。高山の市長とは一緒に1週間くらい現場で調査したりしましたね。意気投合していろんなことをやらせてもらったりもして、一種の演習場でもありました。

これらの地域には理解を示して盛り上げてくれる一般住民もいましたね。草津の中澤清さん(後に町長に就任)はそういう点で随分教えていただいて、そのホテルに行ったり、歴史的な発展過程の勉強もして、こちらも教わったし、地域から学ぶところは多かったですよ。

●海水浴場で一人あたりに必要な砂浜面積を算出

僕は全観連からかなり本も出しており、その一つが日本の庶民的なレジャーとして海水浴場をテーマにしたものです。これはキャパシティ論というか、イモの子を洗うような状態でいいのかという問題提起でした。

日本の海水浴場で脱衣場はこうなっているといろいろな例を挙げました。海外の文献も引用しながら、例えばアメリカはこうだとか混雑の程度の例を挙げ、各国の1人あたりの砂浜面積も出しています。そこから、一人あたり何平米の砂浜面積が最低必要かといったことを述べており、この考え方は瀬戸内海など、いろいろなところで活用されているはずですよ。

観光に関する書籍の出版コーディネーター的なことも結構やっていて、いろいろな分野の人に本を書いてもらいました。例えば黒田静夫さん(運輸省港湾局長・当時)にはヨットハーバー等について「海の観光施設」(1952(昭和27)年)(写真2)を、塩田敏志さんには「キャンプ場施設」(1953(昭和28)年)(写真3)を、また聖成稔さん(厚生省環境衛生部長・当時)には「観光地の環境衛生」(1960(昭和35)年)(写真4)というテーマで水洗トイレや食中毒などについて書いてもらったりしました。

僕が書いた「観光開発をどう考えるか」(1961(昭和36)年)(写真5)では、自分で撮りためた写真をたくさん使って、観光地のあり方について論じました。当時人気があった「岩波写真文庫」のスタイルに合わせ、文章ではなく写真主体にしたら、初版3000部がすべて売れて、後からまた3000部刷ったそうです。

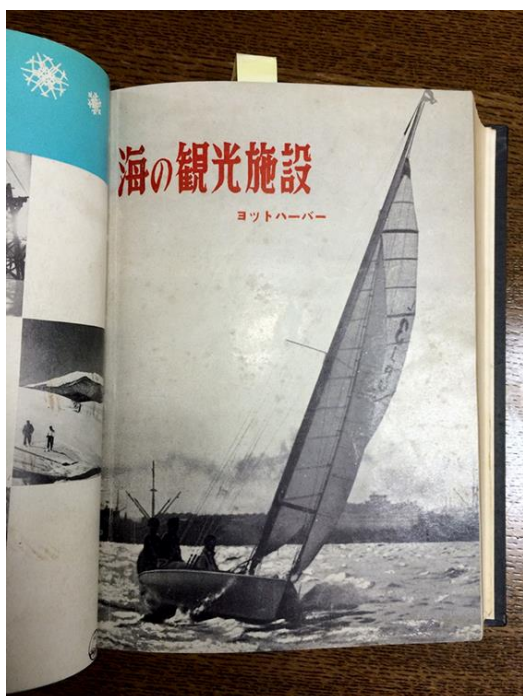


写真2 「海の観光施設」表紙

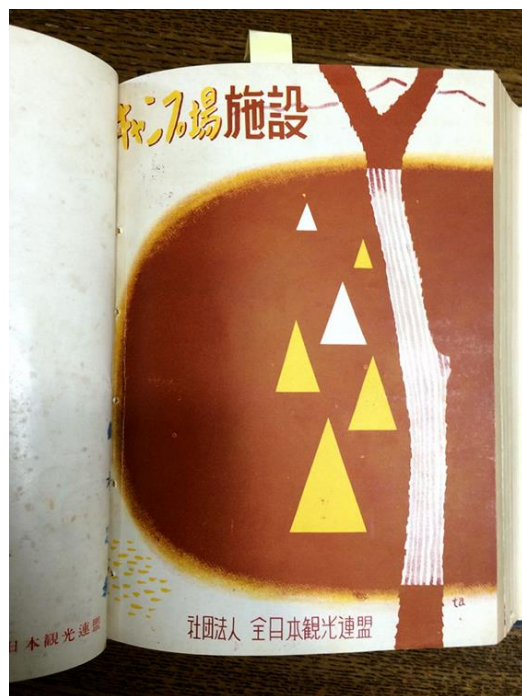


写真3 「キャンプ場施設」表紙

資料：鈴木忠義氏提供

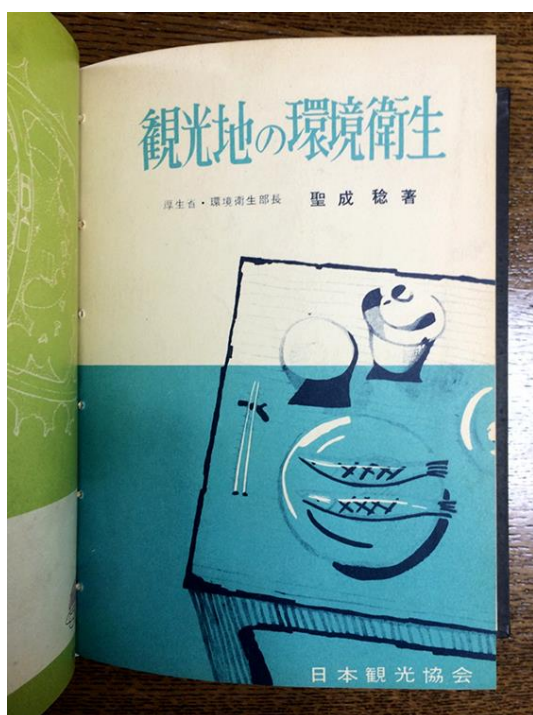


写真4 「観光地の環境衛生」表紙

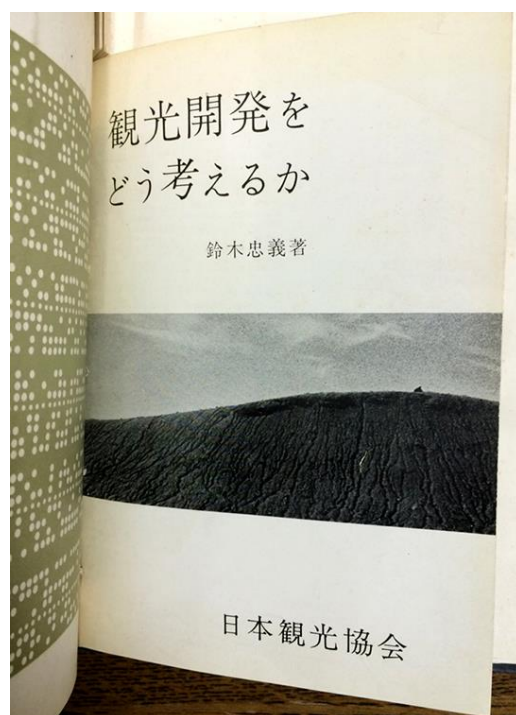


写真5 「観光開発をどう考えるか」表紙

資料：鈴木忠義氏提供

3. 「観光」に対する失敗と反省

【わが国の観光の何が問題か】

観光産業が前面に出過ぎているということです。まず金儲けではなくて、観光地としての魅力を作らないと人が来なくなってしまうんですね。それには行政、業界、観光者それぞれに対する観光についての教育が大事だと思います。

【私は観光分野で何を失敗し、何を反省しているか】

行政、業界、観光者に対する教育が大事なのに、そういう人達を教育しなかったことです。といっても、私一人でできるわけがないんだけど。国全体で観光への認識が足りなかったわけですよ。生産第一主義でね。

4. 「観光」の計画とその実現

【私が関与した「観光計画」は実現したか、その要因は何か】

高山市、草津町、川場村の3カ所での観光計画は実現したと思います。その要因は、経済発展と観光需要をうまくつかんだから。それに、高山市の成功要因はやはり、首長さんですね。首長がしっかりしていて、その下にいい部下がついて、価値観を共有できたことがよかったと思います。

草津は、大学を卒業した頃に恩師の勧めで初めて行って以来、ずっとつき合っていますが、地元を理解者がいるというのは大事ですね。外部からの知恵も必要ですが、やはり地元でそういう人が育ってこないと、本当のいいまちづくりはできないのではないかな。

【(一般的に)「観光計画」はなぜ実現しないのか】

行政当局や首長などが、口では「観光が大事」と言いつつ、観光への理解が不足していることです。要するに「人」がいないということですね。

5. これからの「観光」・「観光地づくり」・「観光計画」への提言

【これからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か】

自然と歴史と文化をもう一度、基本にしっかり立ち戻って見直すことですね。施設ばかりに目がいくけれど、大元になるのはその地域の自然と歴史と文化で、観光客はそういうものに興味を持って訪れるということです。

各省庁には観光というものを、もう少し必需品としてとらえてもらいたいですね。食べるためだけに働くのではなく、余暇社会が到来しているわけです。その中で観光というのは、人生の目的であり、喜びなんですよね。

ですから、いろいろな省庁の仕事に関連するはずなのに、今までは観光に関わる省庁に限られていたでしょう。例えば旧建設省などいろいろなところで、観光というともうダメなんですよ。「運輸省があるじゃないか」と言われて、弾かれちゃう。旧運輸省も、旅館ホテルの代弁者みたいなところがありました。観光に関しては、行政が縄張り争いをしないで横断的に仲良くやっていくようなことができないのかなと思っています。

今は観光庁ができましたが、旧運輸省の延長線ではなく、本来の観光のあり方を考えたり、観光と国づくりについて取り組んでももらいたいですね。観光庁は寄り合い世帯と言われているそうだけど、それは悪いことではなく、むしろ寄り合い所帯の中で、観光というものをしっかり位置づけていくと、彼らが媒体になってくれるのでは。それによって、いろんな方面に理解が広がると思いますよ。

要するに、「いい国とはなんぞや」ということですね。いい国になれば、人は来るんですよ。中国も韓国も東南アジアも、生産力が上がって、余裕が出て来ていますから。いい国づくりを見せないと、世界全体がよくなるし、日本人達もまた彼らのところに行って、彼らの自然、歴史文化にふれることが必要だと思います。

物質的にはもちろん、人間の移動手段や行動、喜びも、グローバル化してきて、それだけ文明が栄えているということですよ。それで、数億の人が動き出したら、一体どういうことが起きるのかということですね。そこでも、人間の喜びとは何なのかを考えることが、非常に大事になってくるんじゃないですかね。

工業技術とは違って、観光の場合は、ヒューマンタッチに関わるいろいろな要素があるので人的交流が大事です。観光客を送り受け入れるという、観光の一番根幹である国際交流を促す意味でも、日本交通公社のようなシンクタンクは観光のアカデミズム集団として、東南アジアなどの発展途上国から、どんどん学生を呼び込んだらいいと思います。

【どうすれば「よい観光地」が出来るのか、よい観光地とは？】

観光地での教育ですね。その教育というのは、観光とはなにかという根本的なものです。観光産業についてはいろいろ専門学校があるけど、もっと真剣に、観光の教育体系を作る必要があるんじゃないかと思います。

【これから「観光計画」が果たすべき役割とは何か】

余暇社会が到来しているわけですから、観光需要をどう吸収するかを考えるには、労働時間がどう下がってきているかということを見れば、自ずとわかるわけです。

しかしその前に、生産についてはこれまで真剣にいろいろ考えられてきたけれども、観光というのは人間本来の目的、喜びに関するということを、観光計画を考える上でもまずベースに置く必要があるのではないのでしょうか。余暇というものは、本来の人間の目的であり、喜びなのだから、そのことを真剣に考えましょうということですね。

第2部 今、考えること

◎「観光学と術」の体系化から見えてくること

私なりに観光学と術の体系をまとめたのがこちらの一覧表です(表2参照)。日本観光研究学会の前身である「日本観光研究者連合」の初代会長に選出されて、発起人として観光の体系をどう考えるか、というのでまとめたものです。学校にずっといたものだから、観光学みたいなものを体系化しなきゃいけないと思い、こういう考え方が観光政策のベースにも必要ではないかと考えて作りました。

表2 観光の学と術の体系 -中分類表-

観光の学と術の体系 -中分類表-

鈴木忠義 87.5.5
改定 91.9.20
改定 92.5.1
改定 03.6.16

<p>1. 観光言論</p> <p>10 一般・分類・概念 11 観光現象記述・統計 12 観光と文芸(文学・紀行・作家) 13 観光史・年表 14 観光の意義・役割・定義 15 観光のあり方 16 観光学と周辺の学術 17 観光学の体系 18 観光用語・単位 19 文献・資料・地図</p>	<p>2. 観光理論</p> <p>20 一般・分類・概念 21 観光学方法論 22 観光主体論 23 観光発生論 24 観光行動論 25 観光効果・評価論 26 観光資源・容量論 27 観光空間論 28 観光変動論 29 発展段階論</p>	<p>3. 観光開発(手法)</p> <p>30 一般・分類・概念 31 観光開発方法論 32 観光企画法・コンペ 33 観光開発計画 34 観光開発設計 35 観光開発推進法・NPO 36 関連開発 37 維持管理法 38 表現法 39 その他手法</p>	<p>4. 観光開発各論</p> <p>40 一般・分類・概念 41 景勝地 42 歴史観光地 43 温泉観光地 44 山岳・高原観光地 45 海洋・海浜観光地 46 河川・湖沼観光地 47 市街地観光地 48 産業(跡)観光地 49 観光地域・リゾート</p>	<p>5. 観光対象と活動</p> <p>50 一般・分類・概念 51 自然系 52 歴史系・保存 53 文化系(会館・ホール) 54 スポーツ・レクリエーション 55 公園・指定地域・墓園 56 医療・保健 57 企業開発レクリエーション 58 販売・流通 59 風俗・ギャンブル・ゲーム</p>
<p>6. 観光手段施設</p> <p>60 一般・分類・概念 61 土地利用 62 交通 63 供給・処理・情報 64 景観 65 環境・自然保護・災害・公害 66 宿泊 67 飲食・休憩・売店・展望 68 小施設 69 野外家具・用具</p>	<p>7. 観光政策</p> <p>70 一般・分類・概念 71 政治 72 法律・規則・条例・保険 73 行政・財政 74 外国観光事情 75 国際観光政策 76 国際交流 77 啓蒙 78 教育 79 研究・シンポジウム</p>	<p>8. 観光経済</p> <p>80 一般・分類・概念 81 観光経済 82 国際観光経済 83 観光消費経済 84 観光産業連関 85 観光金融 86 サービス経済 87 雇用と所得 88 土地経済・開発経済 89 物産と観光</p>	<p>9. 観光経営</p> <p>90 一般・分類・概念 91 観光地経営 92 ホテル経営 93 観光企業経営 94 旅行業 95 接遇 96 料理・食材 97 興業 98 イベント 99 宣伝</p>	<p>0. 総記</p> <p>00 一般・分類・概念 01 人間・人口・「人」 02 社会・家族・くらし 03 文学・歴史・芸術・教育 04 政治・経済・国際・食糧 05 科学・技術・工学 06 国土・地域・都市・地区 07 土・建・造事業所 08 09</p>

資料：鈴木忠義氏提供資料をもとに作成

「1. 観光原論」は、人間にとって観光は何か、観光の意義・役割・定義は何かということですね。特に、観光の意義・役割・定義の部分などは、もしかしたら文学部の仕事かもしれない。ただ単に経済の面からだけ考えるのではなく、それをどう使うかという消費まで考えないといけない。さらに、その消費の中で、生きていくための衣食住プラスアルファについて考えることが近代国家、先進国の役割じゃないかと思います。

「2. 観光理論」は、観光についてはこういうことを勉強すべきだろうということ。 「4. 観光開発各論」では、観光地を歴史、温泉、山岳・高原などに分類しました。

「7. 観光政策」は観光というのは観光庁や国交省だけでなく、各省庁が全部政策として取り組まなければダメだということで、財務省が関連する財政の話もあれば、外務省の国際交流の話もあるだろうと網羅的に書いています。

この表の右肩の一番上に1987年とありますが、その下にいくつか日付が書いてあるように、何回か改訂しています。文部省の学術十進分類法を真似して作ったわけですが、10×10で、100項目が並んでいるということです。時代とともに交通容量など、新しい項目や概念なども追加しており、最初は10項目すべては埋まっていなかったと思います。

この分類表は観光を勉強している人が、今自分がどこにいるか、迷わないための地図のようなものとして提案したんです。こういうことを前提にせずに観光計画などを作るのは、地図を持たずに旅行しているようなものですよ。

地図というのは時代の変化とともに、改訂するでしょう。同じようにこの表も、どんどん改訂する必要があります。その中で自分の役割は何かということを知るという意味でも、地図が必要であり、方法論として常に全体像を眺める必要があります。

自分は観光のどの辺を勉強しようかという指針にもなります。例えば既存の学問で、経営学をやった人は観光政策や観光経済をやろう、とか。ただ、今でもあまりこういうものの必要性は議論されていませんよ。

ただ単に、今の観光地にどうやったらお客が呼べるかだけではなく、まず、「1. 観光原論」をしっかりと考え、そこから政策を打ち出すことは、発展途上国にも参考になるのではないのでしょうか。

◎観光にまつわる雑感～昔からいろんなことに興味があった

この表には「中分類表」と書いてあるでしょ。さらにここから小分類になると、もっといろいろな話が出てくるわけですよ。

例えば、日本でも太閤の花見として殿様が花見を楽しんだり、ヨーロッパでも王侯貴族は昔から観光を行っているでしょう。昔は生産性が低かったから、一般庶民は農耕で食うや食わず衣食住を満たすのでやっとだったけど、機械化されて余裕が生まれてきて、一部の富裕な人のみに限られていた楽しみが、だんだん大衆化、庶民化されてくるところに、現代の意味があるわけです。

観光の歴史もそういうところを解き明かし、現代に対してどういう意味があるかというようなことに焦点をあてて書いたものがあるといいと思いますよ。

観光というのは人生の目的であり、喜びなんですよ。人間は労働も必要ですが、休息も必要で、単なる生産の場、生活の場だけあればいいということではなく、美しく風光明媚なところに行く楽しみ、そこで一杯飲む楽しみも人間には必要でしょう。

観光の歴史も、人間の本性について考えないといけないんじゃないかということです。本来の人間の生きる目的が何なのかと。そういうことから、観光の意義・役割を真剣に考えてみることも必要ではないのでしょうか。

娯楽産業の歴史も興味深いですね。僕は東京の下町生まれで、昔は浅草にたびたび行きました。錦糸町には江東楽天地というレジャー施設がありました。関西では宝塚が有名ですが、宝塚歌劇団を作った小林一三が江東楽天地も作ったんですよ。そういう歴史的意義なども改めて考えると面白いですよ。

そもそも民鉄というのは、大体観光地と結んでいるでしょう。阪急電鉄が宝塚を作ったのも、電車を使ってもらうため、庶民のためのレクリエーションとして作られたわけですよ。

一方、京成電鉄は成田山と東京を結んでいます。成田山のような宗教観光地に運行している民鉄も多いですよ。人間、願いとか救いとか祈りを求めるということで、宗教観光というのも一つのテーマとしては面白い。

そもそも観光の大元には宗教的なものがあるから、結局、人間の生命というものがあるから、それを失う死の恐怖からどうやって逃れるかということがありますね。身の危険を感じて神仏に願ったり。そこが大元にあって、そこから宗教観光が発達して、人間の手の届かないものを神頼みにするから、成田山があれだけ人を集める。

根本にあるのは人間の生命財産、安全を守りたいということですよ。そういう根本的な問題は、本来からいけば大学の文学部の分野かもしれないけど、なぜ人間が旅をするのかという原点の研究にも関わり、非常に大事ではないかなと思います。

スポーツの歴史もひもといてみると、興味深いと思いますよ。例えばマラソンとかね。駅伝は、最初は今でいう郵便がルーツでしょう。それを競技化したわけですよ。もっといえば、飛脚だってマラソンのルーツと言えるかもしれない。

最初は必要に迫られて走っていたのが、人間の願いである丈夫で長生きという体育的なものと結びついてきて、競技化したり、学校の科目にしたりしたと。そういうものを競技化するところに、人間の心理的なものがあるんじゃないか。平穩に争う手法として、いろんなスポーツ競技が出て来たのではということですよ。

こういう点からも、人間の生存の手段としての労働、人間の行動と、そうではない余暇活動もあるということをきっちり整理することが必要ではないかなと思います。

旅館の歴史も、最初は動機があって、民宿が原点だと僕は思ってるんですね。どういう形で始まったのか、それが現代とどう関わるのかということから探ると面白いと思います。

例えば、蒲郡ホテル(現蒲郡クラシックホテル)が、なぜあの場所にできたかということですよ。そこには、経済関係から国際観光を促進しようという背景があって、外国人をどうやって泊めるか。外国人はベッドで寝るのだからベッドのある部屋を作らないといけないと。時代背景なども当然ありますし、人間の風習の話もあれば、ホテルの歴史も関わってきて、一つの各論としては大事です。

人間はいつから風景というものを観賞するようになったかということも知りたいですね。本来なら風景計画の人達がやるべき検証ですが、絵画はそこから生まれたものでしょう。

観光に行くと、あそこも行った、ここも行ったという自慢話をするという人間くさい部分もあり、それが観光の宣伝やモチベーションの喚起につながると言えますよね。

こういった観光にまつわるさまざまなことを並べ、KJ法(文化人類学者の川喜田二郎氏が考案したデータ整理の手法)がデータをまとめるために考案した手法などを使って、観光に関わる人達みんなで意見を出し合って、うまく分類して系統立てていく必要があるのではないのでしょうか。そういう中から、どういう研究をしないといけないか、どういうことを政策に打ち出さないといけないか、根本的な課題が出てくるんじゃないですかね。

それがあって、初めて僕が作った中分類表の「2. 観光理論」にあたる、どういうものが人間の心を導いていくかについて考えられると思います。それをベースに文学部や交通分野など、各分野の専門家に委託して個別の研究を深化させるといいのではないのでしょうか。

とにかく僕はいろんなことに興味があって、よく女房に怒られましたよ。多趣味すぎると。「あなたは何が専門なんですか、土木工学でそんなこと教わるんですか」と(笑)。

例えば群馬県で発達した織物文化にも非常に興味がありますね。いつ、ああいふ機械が入って来て技術が発達したかとか、材料もいろんなものを必要とするわけ、それをどうやって手に入れてきたかということですね。

料理番組も僕はよく見ます。外国に行った時も、この食べ物はどうやって進歩してこうなっているのかとか、接待用に使われるのはなぜかとか、考えますね。

それはやはり人間が動物と違って、衣食住を必要とするからで、ここではこんな食べ物があるのかとか、こういう生活をしているのかと、観光の中でも人間の生活に一番興味があります。

◎計画に必要な5つの要素とは

観光計画に必要なのは、「主体」、「目的」、「対象」、「手段」、「構成」という5つの要素ですね。主体と目的からニーズが決まり、対象と手段から受け入れ側が決まり、それらをまとめるのが構成となります。これは観光に限ったことではなく、どんな計画にでも使えます。

例えばユースホステルなら、主体は若者となります。主体というのはお客さんですね。目的というのは、お客さんが何を目的とするかということです。ユースホステルなら、単なる遊びではなく、地域の情報や地域学の基礎を知るといったことも目的になり得ます。その上で、対象地はどういうところを選ぶかとなるわけですね。この場合は、特に温泉地でなくてもいいわけですね。

そういう風に考えていくと、いろいろな観光の企画を考える時にも、どういう主体に向けて行うのか、資源として何が不足しているかということもわかるわけです。常にこの5要素を頭に入れて考えることは、誰がお客さんかを考えることでもあります。

主体の目的も時代に応じて変化します。かつて、熱海などでは宴会や接待が主な目的でした。昔は熱海で総会をやる会社も随分多く、午前中から午後3時くらいまで総会をやって、夜は懇親会と称する宴会を開くんです。今、そういう企業はないんじゃないかな。

ホテルや旅館の経営者もそういう観点から自分たちの商売を見てみると、現状がよくわかるし、将来どうなるかということも考えられます。

例えば、車社会になって車という手段が出て来ると、駐車場が宿泊施設の決め手になってきたわけです。そこで最初に出て来たのが、アメリカで発達したモーターで、ポイントは車を自分の泊まっている客室のすぐそば、目の届く所に置くということですよね。僕もそうでしたが、車を最初に持った時には傷つけられないかというのが、とにかく心配でしたから。

計画の5要素をちゃんと押さえているのがプロです。宿泊施設などでも「どういうお客さんを狙っているのか」が大事になりますよね。計画主体は何かということをはっきりさせると。それにどういう行動がふさわしいか、どういう対象を準備したらいいのかということですよね。学生が主体で、修学旅行が目的なら、その目的に叶った対象が決まってくるわけです。

京都はある程度遊興施設があるけど、奈良は未だに少ないのは、修学旅行が多いことにも関連すると思います。例えば斑鳩の里に何か作りたいと相談されて、アドバイスをする場合、飲み屋を作るのは違うなということになりますね。計画の5要素をちゃんと押さえることは、観光地の性格を考えることにもつながりますね。

地域としては変えていいものと変えてはいけないものをはっきりしてくると思うんですね。ここは我々の大元になるところだから変えない、後のところは近代化してもいいけどというように。松本で言えば、お城の周囲のゾーンとかね。地域としては小さく残すところもあるでしょうし、子孫のために大きく残すところもあるでしょう。そういうことを考えるきっかけとしても、観光の意義と役割があるんじゃないでしょう。

◎まちづくりも「背景」が大事

女性がなぜ化粧するかというと、人に見られるからですよ。景観学的にも「見る」「見られる」という関係、視点と対象の関係が非常に大事だと言えます。見られることに対して人間がどう感じるか、見る方がどう感じるか。さらに視野を広げて建物を考えた場合、さらに地域全体として見た場合はどうなのかということです。

ようやくこの頃、地域で景観というものが重視されてきましたが、ポイントとして一つ、「揃う」ことがあると思いますね。人間は自分だけ目立ちたいという思いがありますが、神戸の山手などは、建物の色をこの範囲で選ぶなど、自分たちで規制してますね。

倉敷なども、岡山の大原財閥の大原総一郎さんが洋行から帰ってきて、俺のところがちゃんとやらなければということで、いろんなまちづくりの規制ができてきたんですね。その意思を大原さんの後継者もちゃんと継いでいます。そういうことを意識して、まちづくりをする地域も出て来ています。

そもそも昔は原材料が制約されていましてからね。レンガならレンガしか使えなかったから、どの建物も自然とレンガ造りで揃ったレンガ街みたいなのができたわけです。その後の時代は、耐久力の問題もあります。外国は材料工法がある程度決まっています、建物に耐久力がありますが、日本はすぐ建て替えるでしょう。

木材を使うから壊れやすく、回転が早い。材料工法もいろいろ出てくるので、新しいことをやりたがるんですよ。それで20年も経つとがらっと景観が変わってしまう。素封家の家は門構えや塀、母屋まで統一感があるけど、まわりの町並みは新建材を使った家が並んでいたりして、非常に難しいですね。

建物の回転が速いのは日本の一つの特徴ですし、建築家などはそれでメシを食っているから、一概によくないとは言えませんが、自分の作ったものだけ、あるいは自分の家だけを目立たせようとするのではなく、やはり周囲との調和を考えてほしいと思います。僕が学生や助手をやっていた時に洋画家の中村琢二先生が教えに来ていて、学生と一緒にデッサンを教わった時に「絵は背景が大事。背景で描くんだよ」と教わりました。その考えは、景観づくりにも共通しますね。

地域の中の、部分的な整備でもいいんです。最近あまり言われなくなったけど、風致地区という都市計画の規制があるので、そういうものも使って魅力あるようなまちづくりをやっていくといいのではないかと思います。

ちょっと視点を変えると、ディズニーランドやUSJなどは世界観が統一されていますが、その代わりに、自分のところにお客さんを入れたらある意味、一步も外に出さないという点で徹底していますよね。雇用機会の創出はあるだろうけど、ああいう大企業の観光開発が、地域にどういう経済効果をもたらしているのかも気になるところです。

◎観光は人間の本質的な喜び

観光を考えることは、最終的に人間の本質的な喜びとは何かを考えることにつながると思いますね。例えば子どもが歩き出して、よちよち歩きでも目を離すと、すぐどこかへ行ってしまおうでしょう。原始時代の人間も、今いる場所から移動するきっかけは、別の場所にもっとうまいものがあるんじゃないか？といった好奇心とか欲求だったのではないですかね。

子どもは、電車などの乗り物に乗ると飽きることなく窓の外を見ますよね。それだけ場面が変わることについての魅力があるんじゃないかな。さらにいうと、男の子が小さい頃に喜ぶおもちゃは、大抵乗り物ですよ。自動車とか列車でしょ。児童心理学などに関わるのかもしれないけど、こういうことも、やはり観光の原点じゃないかと僕は思うんです。

そう考えると、人間の本性として、「動く」「移動する」というのがあるんじゃないか、そしてその延長に、いろいろなものを見て歩きたいという基本的な欲求があるんじゃないかなど。人類学や心理学にも関連しますが、そういう原点を考える観光研究が行われるといいと思いますね。

産業が発達して人間が衣食住に追われないようになり、その余裕はどこに行くかという、やはり美しいものとか楽しいものを見たい、体験したいという欲求に向かうわけです。そうなった時、生きる目的はなにかと考えていくと、観光というものが大きく浮かび上がってくるのではないのでしょうか。美しいものの中には自然もあり、人間が作り出したものもあります。観光を考える場合、人間の欲望論のようなものが心理学で問われるのではと思います。

いかにバス・トイレが進歩しても、大きなお風呂の温泉に浸かった開放感は、小さい風呂では味わえない感覚で、そういう非日常性をどう演出していくかは、観光開発では大事なんじゃないですか。



写真6 鈴木忠義氏への取材風景2
(2016年(平成28)3月15日、東京都世田谷区)

◎さまざまな交流の機会をどう演出するか

「観光」という言葉を(他の分野の)学者の先生達は「俗っぽい」と言って使いたがらないけれど、重要なことなんです。僕は人間の本性に根ざしたものだろうと思っているわけです。

それをいかに産業の支えにもっていくかということですね。要するに経済の中の分配論ですから。儲けたお金をどう使うか。そこで楽しみを提供して、楽しみがお金になるということですよ。

苦あれば楽ありという人間の生活を波形のグラフに描いてみて、カーブの上が「楽」とすれば、そこに入るものは何なのかと考えると、重要な要素の一つに「観光」があると思います。それを支えて来たのが交通手段であり、情報であると。

一方、カーブの下の「苦」が労働とすれば、オートメーション化などで労働の内容も変わってきているでしょう。その変化によって生まれた時間が波の上の方をどんどん押し上げているはずで、観光に関わる研究者などは、その「上の部分」をどうするか考えることが大事だと思いますね。

自分が別の場所を訪れるだけでなく、自分の地域によその人を招くことも「楽」の一つになってくると言えます。特に老舗旅館の女将さんなんかは、古いお客さんが来ると金銭以外の喜びみたいなものがあるんじゃないかな。僕のわずかな体験では、岳温泉のひなびた温泉宿に行って、普通のお客さんじゃないような待遇をしてくれたことがあります。人間の喜びとして「会う」ということ、いわゆる交流というのは非常に大事だと僕は思います。

同窓会なんていうのも、その典型じゃないでしょうか。そういう意味では故郷に帰る帰省旅行なども重要で、そういうものも含めて一言で観光と言えるかもしれない。さまざまな交流の機会をどう演出していくかが、観光の大事な役割ではないでしょうか。

2016年3月15日

東京都世田谷区にて

取材者：公益財団法人日本交通公社観光政策研究部
堀木美告(現・淑徳大学)、後藤健太郎、西川亮

2016年8月26日文章校正・追加終了

* 鈴木忠義氏の観光まちづくりに関するお考えは当財団機関誌「観光文化」215号に「人間の『喜び』と『生きがい』を生む観光地づくり」として掲載されています。ぜひ併せてご一読ください。

https://www.jtb.or.jp/wp-content/content/img/publish/bunka/bunka215_P2-7.pdf

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。

<http://www.jtb.or.jp/etc>